雑穀の直売と山村の活性化
― 岩手県北部山村の事例 ―

篠 原 重 則※

Ⅰ 緒 言

農産物が農村の生産者から都市の消費者に流通する方式は、中央卸売市場、地方卸売市場などの卸売市場を経由して流通するのが、主体であった。しかしながら近年は市場外流通とよばれる、卸売市場を経由することなく流通する生鮮食料品の比重が増しているといわれている。その市場外流通のなかで、近年注目されているのは、地方自治体や農協などが直売施設を開設し、そこで農村の生産者が都市の消費者に、野菜・果実などを直接販売する直売方式の増加していることである。

このような直売施設については、農水省の本庁[1]や、各地区の農政局などで、その実態把握にのりだしている。[2)~7)]

しかしながら、全国を通して統一的指標にもとづく農林水産物の直売施設・直売活動に関する実態調査は、農水省の消費統計室において、2004年度にようやく実施され、2005年5月にその概要[8)]が公表されたところである。農林水産物直売に関する官庁統計が遅れたのみでなく、農林水産物直売に関する研究者の全国的研究組織も、2005年3月にようやく結成された状況である。

農産物直売に関する研究は、1990年代になって盛んになるが、その直売事業が各県の農業普及所の生活改善運動の一環として取りあげられたものが圧倒的に多い。[9)~13)]その研究を通読すると、①流通論の視点を重視した研究、②小売業・マーケティングの観点を重視した研究、③消費者の行動の観点を重視した研究、④交流拠点・グリーンツーリズムを重視した研究に大別できるが、堀田学が指摘しているように、直売事業が農村地域の活性化にどのように寄与しているかの視点に乏しいといわれている。

地理学の分野で農産物直売を手がけた研究としては、鷹取泰子・岡橋秀典などの論考がみられる。このうち鷹取の研究[14)]は、埼玉県の115ヶ所に及ぶ農産物直売所の立地展開とその類型化を試み、さらに都市近郊型と観光地型の農産物直売所の地域特性を対比している。一方、岡橋の研究[15)]は主として中国・四国地方の農産物直売所の成立の背景をさぐり、さらに東広島市での実態調査によって、農産物直売所の類型区分を行い、その存立基盤を究明しようとしている。両者の研究は、農産物直売についての地理学の研究に先鞭をつけたものとして評価されるが、先述の農業研究者の研究同様、直売事業が地域社会の活性化にどのように連動したかの点は充分に解明しているとは言いがたい。

筆者は元来、過疎山村の研究を専門としてきた地理学徒である。当初は四国山地の過疎山村の変容と集落の再編成が、その山村の地域特性との関連のもとにどのように進展していったかに興味を覚えていたが、[16)]1990年代半ばからは過疎山村の活性化をいかに図るべきかに関心が向って行った。[17)]山村を探訪するなかで、過疎と高齢化に悩む山村のなかで、最も活況を呈しているのは、農産物の直売所とそれに参加している農家であるとの認識に至った。1990年代末から2000年当初に行った愛媛県日吉村[18)]と中山町[19)]の農産物直売と山村の活性化に関する研究は、その認識のもとに始めた研究の一部である。2003年度より科学研究費の交付を受けて実施した「農林水産物直売事業による農山漁村の活性化」に関する研究は[20)]、このような認識のもとに推進している研究であり、本研究もかかる研究の一環をなすものである。

今回報告する岩手県北部の山村は、わが国の大都市圏からは遠く隔たり、農産物の市場に恵まれず、その上、ヤマセが吹きすさぶ冷害の常襲地であった。このようにみると岩手県北部は農産物の直売地としては恵まれた地域とはいえないが、いかなる農作物を栽培し、どのような販売形態を導入することによって、農山村の活性化を図ったかを解明することが本論の目的である。

※香川大学名誉教授

Ⅱ　岩手県北部山村の地域特性

岩手県北部の山村は、北上山地の北部に属し、青森県八戸市に注ぐ馬淵川と新井田川の流域であり、行政的には二戸市と九戸郡軽米町を主とする地域である。この地域は隆起準平原の地形で知られる北上山地が次第に高度を下げ、標高400－500mの山地と200－300m程度の緩斜面の地形が発達し、その間を前記の二河川が谷底平野を形成しながら蛇行して流れている。気候は夏季オホーツク海気団の高気圧より冷湿なヤマセが流入する地域として知られ、東北地方の代表的な冷害常襲地として知られていた。現に2003年にはヤマセの吹きすさぶ曇天が続き、稲作は前年の40～45％程度の不作となった。北上山地は日本のチベット地帯と言われてきた。それは広大な土地所有を誇る地主の旦那と名子と言われる貧しい小作人から構成された前近代的村落遺制を留めていたことによるが、二戸市や軽米地区には、第２次世界大戦後の農地改革までは、そのような遺制もみられた。

Ⅲ　雑穀栽培の復活と岩手県北部の雑穀地帯

岩手県北部の冷害常襲地帯は冷害に強いヒエをはじめ、キビ・アワ・ソバなどの雑穀を栽培する自給的畑作農村が多かった。しかしながら第２次世界大戦後の灌漑施設の整備や稲作技術の向上によって稲作が普及し、雑穀作は一時みる影もないほど衰退しまっていた。しかしその雑穀が、近年にわかに復活してきた。それは岩手大学農学部の西澤直行教授によって、雑穀が繊維やミネラル、ビタミン類が豊富で、血液中の善玉コレステロールの濃度を上げ、動脈硬化などの生活習慣病の予防に効果があり、機能性穀類であることが解明[21)～23)]されたこと、さらに著名な料理研究家などが雑穀のメニューを多く発表し、雑穀料理のおいしさを紹介[24)]したこと、さらにマスコミが農薬を使用しなくても栽培可能な雑穀の安全性をこぞって喧伝したことにある。今、雑穀は若者をはじめ、多くの世代に普及する健康食として静かなブームを呼び、都会のレストランなどにも雑穀料理を提供する店が多く出現する有様[25)]となっている。

図１はわが国のヒエ・ソバの栽培面積の分布を示す。特にヒエ栽培においては、岩手県は2002年現在全国の栽培面積149haのうち、その84％に当る125haを占め、全国的に圧倒的地位を占めていることがわかる。また岩手県のソバ栽培面積は478ha（全国の12％）を占め、東日本のソバ産地の一角にあることがわかる。なお岩手県のその他の雑穀栽培面積を示すと、アワ19.4ha（全国の37％）、ハトムギ50.1ha（全国の17％）、キビ18.1ha（全国の12％）、アマランサス[26)]6.3ha（全国の58％）を占め、全国有数の雑穀産地であることがわかる。

岩手県がヒエをはじめとして雑穀栽培が盛んなのは、冷害の被害を避けるためであるが、2002年はヤマセが

写真１．二戸市高村英世様の玄関先のヒエシア（2003年８月）

写真２．岩手大学農学部の西澤直行教授（2003年８月）

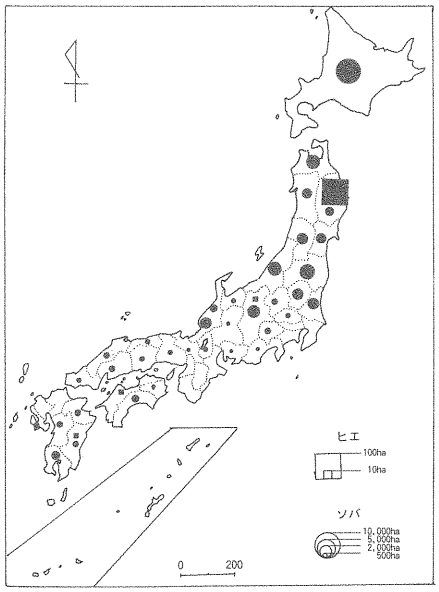

図１．わが国のヒエ・ソバ栽培面積の分布（2002）
注）農業振興励会（2003）「新需要穀類等生産流通体制確立事業実績報告書」の統計資料より作成

表１　岩手県北部の市町村別の雑穀栽培面積（2002年）

	二戸市	軽米町	一戸町	九戸町	浄法寺町	計
ソ　バ	1359(76)	1251(24)	1112(73)	348(24)	280(16)	4350(213)
ヒ　エ	427(25)	390(24)	43(7)	50(7)	11(3)	921(66)
ア　ワ	191(28)	23(4)	29(5)	16(4)	6(4)	265(45)
キ　ビ	304(37)	139(6)	108(24)	156(22)	34(18)	741(848)
タカキビ	16(17)	80(4)	30(11)	47(10)	3(3)	176(45)
アマランサス	16(8)	295(6)	32(13)	1(1)	0.3(1)	344.3(29)
エゴマ	12(2)	45(26)	0	0	2(5)	59(33)
ゴ　マ	3(1)	36(20)	0	0	0	39(21)
計	2328	2259	1354	618	336.3	2895.3

注）軽米町役場資料による。
　　面積の単位はアール、(　　)は栽培戸数を示す。

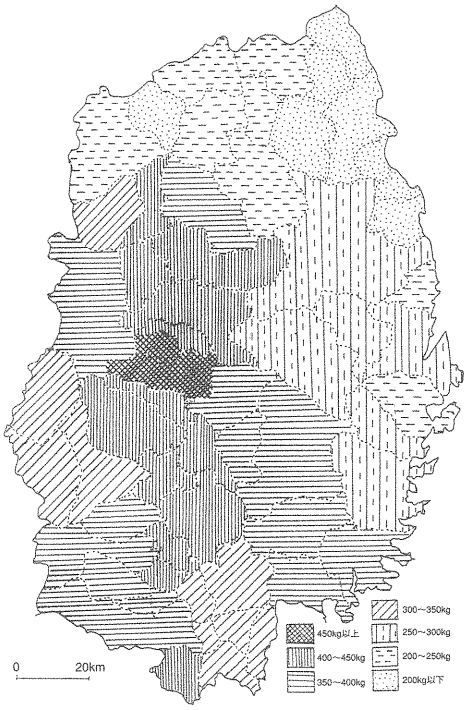

図２．平成15年産岩手県の水稲市町村別収穫量の分布（2002）
注）岩手統計情報事務所（2003）：「平成15年産農作物統計」より作成

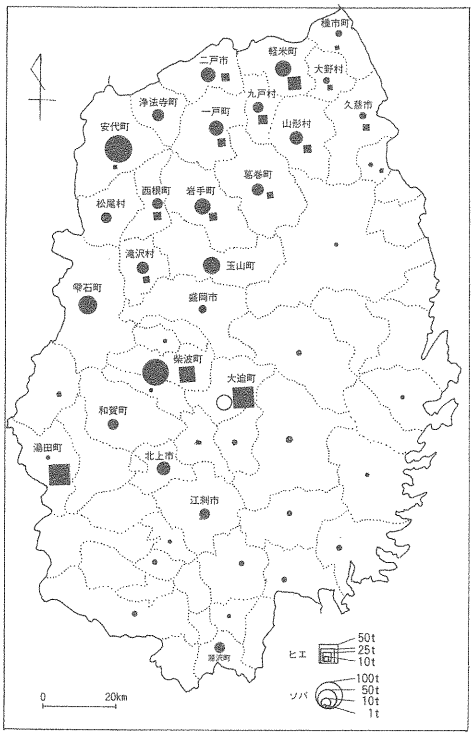

図３．岩手県のヒエ・ソバ収穫量の分布（2002年）
注）岩手統計情報事務所（2003）：「平成14年産農作物統計」より作成

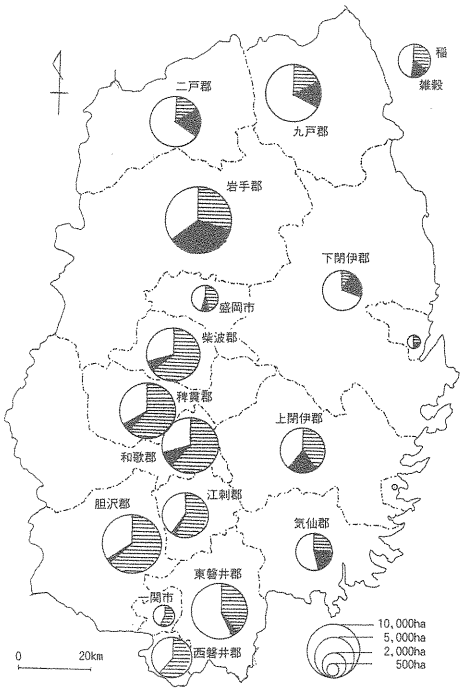

図４．昭和25年当時の岩手県の郡市別の耕地面積と水稲・雑穀栽培面積の比率
注）1950年農林業センサスより作成

卓越し、冷害の著しい年であった。図２は2002年の岩手県内の水稲の市町村別の10a当りの収穫量の分布を示すが、ヤマセの侵入通路に当る県北部は250kg以下となっている市町村が多い。10a当りの収穫量の低い市町村を上げると、山形村53kg、大野村73kg、普代村172kg、田野畑村184kg、浄法寺町193kg、軽米町208kg、九戸村224kg、二戸市242kgなどとなっている。

図３は岩手県の市町村別のヒエ・ソバの収穫量の分布を示すが、これらの作物は冷害の被害の大きい地域にその対応策として栽培していることが如実に示されている。

図４は1950年当時の岩手県の郡市別の耕地面積と水稲、雑穀の栽培面積の割合を示しているが、県北部の九戸郡・二戸郡・岩手郡と三陸海岸沿いの下閉伊郡・上閉伊郡・気仙郡に雑穀栽培面積が多いことがよくわかる。

表１は、今日雑穀栽培に力を入れている岩手県北部の市町村ごとの雑穀栽培面積を示すものである。

Ⅳ　二戸市と軽米町の雑穀栽培と販売

岩手郡北部の山村のなかでは、二戸市と軽米町が雑

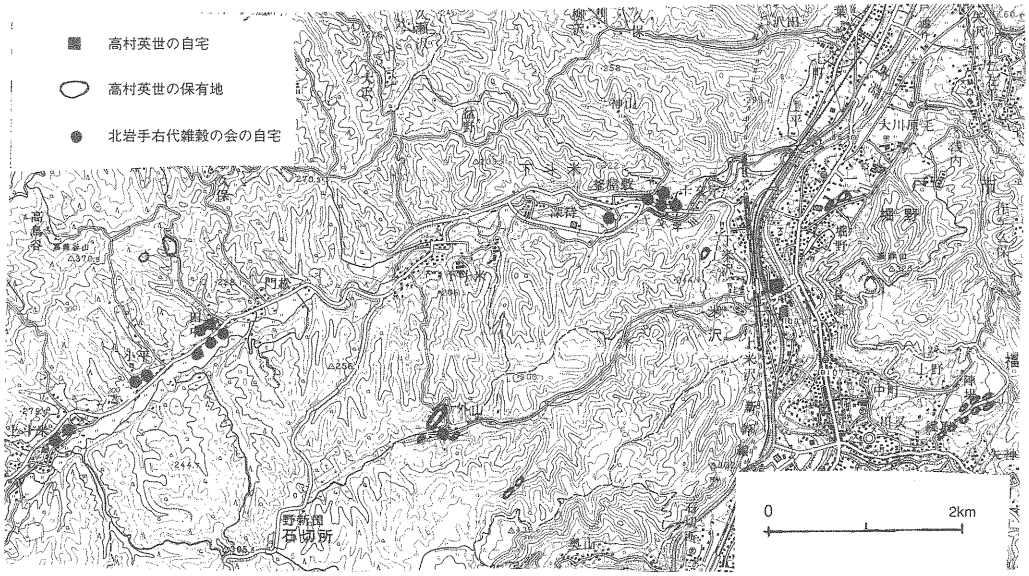

図５．雑穀有機農家高村英世の自宅と保有地の前に右代雑穀の会のメンバーの分布
注）ベースマップは平成15年修正「一戸」・平成４年修正「浄法寺」図幅による

穀の栽培に力を注いでいる。二戸市の雑穀栽培のリーダーは同市の米沢（まいさわ）の高村英世である。彼は二戸市の地域おこしの一環として、1995年「雑穀生産組合伊加古五穀の会」を結成するが、有機栽培における雑穀栽培をめざし、1999年に「北岩手古代雑穀の会」を新たに結成し、同会の会長となっている。2003年彼に同調する会員は15名[27]である。

高村英世の自宅とその保有地、北岩手古代雑穀の会員の居住地は、図５に示す。図６は2003年現在の高村英世の土地利用状況を示す。彼は４地区に点在する8.5haの耕地で、1.9haの有機栽培[28]の雑穀と0.1haの水稲を栽培し、あと慣行栽培の雑穀1.4ha、小麦2.4ha、ライ麦0.7ha、水稲0.3ha、花卉0.2haを栽培し、1.5haの休耕地[29]をかかえている。高村に同調する慣行栽培の雑穀栽培面積はヒエ12.3ha、キビ4.0ha、アワ0.8haである。

高村英世[30]の雑穀の出荷は電話・ハガキ・手紙・ファックスによって注文を受ける。図７は高村農園の雑穀等の通信販売の出荷先を示すが、地元の岩手県が最大の出荷先である。次いで首都圏・近畿圏・中京圏などの大都市圏に主として出荷している。東京都はＮＰＯの法人と雑穀の流通協定を結び、群馬県はアトピーに悩む家族の需要が多いという。15名の会員の雑穀は自らの慣行栽培の雑穀・小麦・ライ麦などと共に雑穀パンを生産する一戸町のかなん牧場（知的障害福祉工場）に出荷するものが多い。

二戸市の東隣の軽米町は2000年にミレットサミットを開催したり、町内にミレットパーク（1995年農水省の補助事業で開設）があるなど、二戸市と共に雑穀栽培に熱心な町村である。

軽米町には二つの直売店や、町営のミレットパーク、町内の個人商店などでも雑穀の販売や雑穀料理を提供しているが、雑穀販売の中心は同町軽米にある尾田川農園である。尾田川農園は元来雑穀栽培農家であったが、1986年より雑穀販売に転じ、今や北岩手随一の雑穀販売業者となっている。尾田川農園は軽米町（37戸）・二戸市（８戸）・九戸町（９戸）など約60戸の農家と雑穀の契約栽培を締結し、その農家から納入した雑穀は、北は北海道から南は大阪府に至る小売店・問屋・百貨店など140店舗に出荷すると共に、全国各地の500戸余の顧客に通信販売をしている。図８は2004年現在の通信販売の顧客の分布である。その顧客の分布をみると、神奈川県・東京都を中心とする首都圏、大阪府を中心とする近畿圏、名古屋を中心とする中京圏に多く、近年の大都市圏における雑穀食ブームに乗って売上げを伸ばしているといえる。

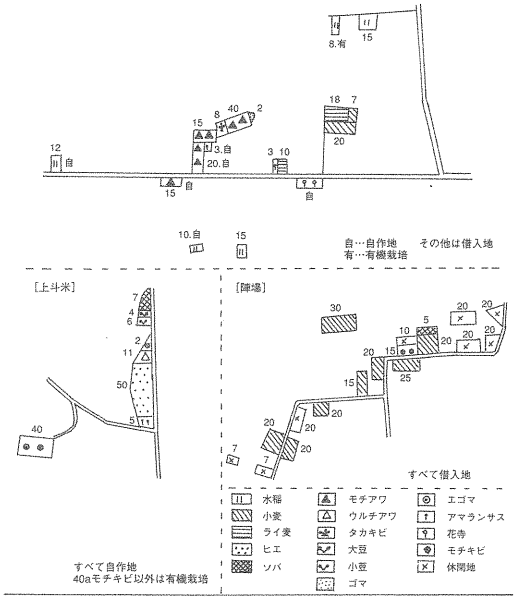

図６．雑穀有機農業認定農家の高村英世の土地利用状況(2003年)
注）高村英世提供資料、観察調査により作成
図中の数値は栽培面積ａ（アール）と示す

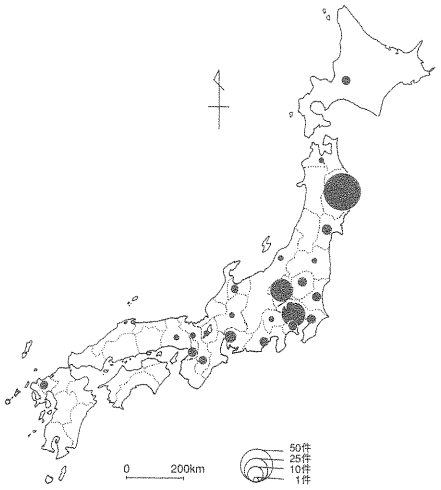

図７．二戸市高村農園の雑穀出荷先(2002年)
注）高村英世提供資料より作成

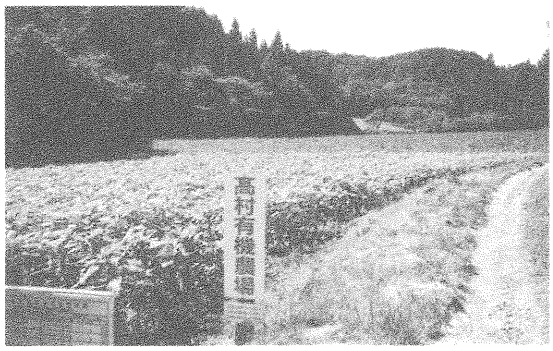

写真３．二戸市上斗米の高村有機農場（2003年８月）

写真４．二戸市上斗米のアマランサス（2003年９月）

写真５．二戸市上斗米モチキビを刈る農夫（2003年９月）

写真６．二戸市上斗米高村農園のモチキビの除草作業(2003年９月)

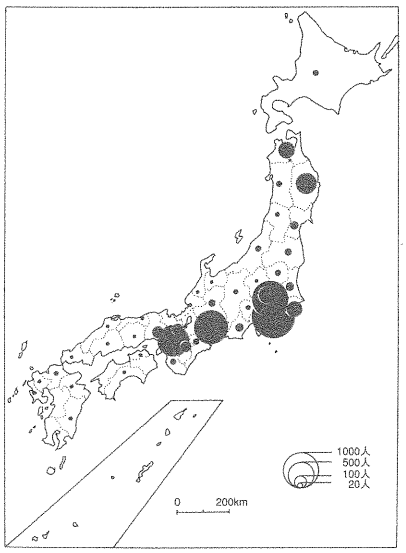

図８．岩手県経米町尾田川農園の通信販売による顧客の分布
（2004年９月）
注）尾田川農園提供資料より作成

Ⅴ　二戸市の雑穀生産の農・学・産提携の構図
―結語にかえて―

岩手県北部の二戸市において、雑穀栽培が復活し、山村が活性化しているのは、栽培農家と地元大学の研究者と産業界が提携しているのが、その要因であるといえる。図９はその構図を摸式的に示したものである。

二戸市の雑穀生産農家の代表は高村英世である。彼は自ら雑穀を有機栽培で生産すると共に、彼の行動に賛同する者に雑穀栽培を推奨し、その販路を確保している。いわば二戸市の雑穀栽培の中核的人物であるといえる。高村英世の雑穀栽培が有機雑穀であると認定を出すのは、盛岡市の民間営利団体ＡＳＡＣであり、この機関が全国唯一の機関である。悪徳業者によって、輸入雑穀が有機雑穀に衣がえされることが防止でき、高村英世にとっては、有機雑穀の栽培が有利に行なえるようになった。

岩手大学農学部の西澤直行教授は、雑穀の機能分析を行い、それを学会で研究発表すると共に、広く報導

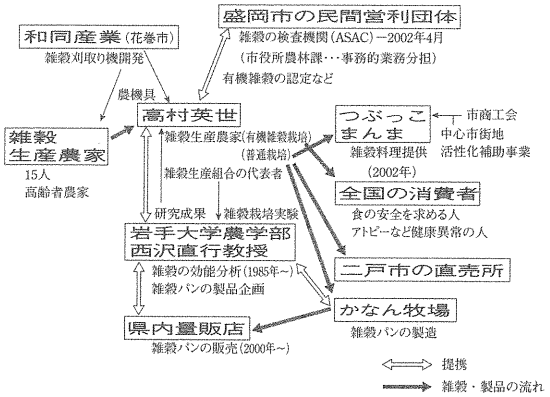

図９．二戸市の雑穀生産の農・学・産提携の構図
注）聞き取り調査より作成

写真７．二戸市上斗米のヒエ畑（2003年９月）

写真８．二戸市米沢のモチアワ（2003年９月）

写真９．二戸市駅前の「つぶっこまんま」で調理する郷土料理研究グループの婦人たち（2003年８月）

機関にも雑穀の効能をＰＲする。また雑穀パンの製造を考案し、雑穀パンの製造所と提携し、その雑穀パンの県内の量販店で販売促進にも寄与している。高村英世と西澤直行教授の関係は、高村が自らの圃場で雑穀栽培の実験を行い、西澤教授が研究成果を高村に提供するということで、実験データの提供とその成果の享受ということで、強い信頼関係で結ばれている。

雑穀栽培にとっては、その収穫作業が一つの困難点であったが、高村英世と協力して、雑穀刈取機（ジョイ刈り）を開発したのは花巻市の和同産業である。この機械を使用すると、10a当りのヒエの収穫において、４～５人役を要したものが、２～３時間で処理できるという。

二戸市のJR駅前の「つぶっこまんま」は2002年７月に開店した。東北新幹線の駅前のバス乗り場の建物内にあるこの食堂は、北岩手の雑穀文化の普及に大きく貢献している。ここは空き店舗になっていたところを、市商工会の中心市街地活性化補助事業（国の補助事業）を活用して、新店舗に改装された雑穀料理－つぶっこ膳・五穀ラーメン・つぶっこ雑炊など－を提供する食堂として再出発した施設である。運営は二戸市の郷土料理研究グループが行っている。運営グループは10人で構成されているが、食材は会員が持ちより、調理は会員の輪番制で行う。東北新幹線の停車駅でもあるので、東京方面からの雑穀食を味うためのツアー客も多い。

岩手県北部の雑穀栽培とその販売による地域社会の活性化は、自治体や農協などが主体となって行なわれているのではなく、篤農家や民間業者が主体となって行なわれているところに特色を有する。それはこの地域のいかなる精神風土によって支えられているのかの究明は今後の研究課題としたい。

〔付記〕本稿は2004年３月日本地理学会春季学術大会において研究発表したものに加筆訂正したものである。資料収集にあたっては、岩手県庁農林水産部、二戸市産業振興部、岩手県軽米町商工観光課、同農林課に大変御協力をいただいた。また岩手大学農学部西澤直行教授、二戸市の高村英世様、同市の嶋野賢一農林課長補佐、同市の安藤直美様、軽米町尾田川農園の尾田川勝雄様には、それぞれ懇切なる御教示をいただいた。

なお本研究は平成15年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ・２）「農林水産物直売事業による農山漁村の活性化に関する研究」（課題番号15500694）に関する研究の一環であり、その研究費の一部を使用させていただいた。

注および参考文献

1）農林水産省統計情報部（1998）：「地元農林水産物を活用した加工・販売事業による地域活性化への取組事例」、農林統計協会、157頁。

2）中国四国農政局（2001）：「特集中国・四国の地産地消について」、119頁。

3）東北農政局（2003）：「東北管内における産地直送施設の概要」、446頁。

4）北陸農政局（2003）：「食と農の一体化推進プロジェクトチーム報告」、194頁。

5）関東農政局（2003）：「都市と農村のふれあいＭＡＰ－関東農政局管内10都県」

6）九州農政局（2003）：「新鮮農産物直売所の概要」、14頁。

7）北海道統計情報事務所（2004）：「ふれあいファームガイド2004」、186頁。

8）農林水産省統計部消費統計室（2005）、農産物地産地消実態調査の公表にあたって、統計部報しぐま７月号（通産555号）。

9）櫻井清一（1997）：中山間地域における農産物流通システムの新展開－直売をはじめとする多様な販路形成－、農業研究センター経営研究39、pp13～25。

10）小寺学（2000）：農産物直売所の運営方法と販売行動の特徴－岡山県の事例を中心に－、中国農試農業経営研究、129、pp18～29。

11）片倉和人（2001）：消費者にとって直売所の魅力とは－直売所の利用客の意向を探る－、農業と経済、67－９、pp151～159。

12）堀田学（2002）：ファーマーズマーケットの今日的特質と定着方策、農村生活研究、第46巻第４号、pp６～14。

13）辻　和良（2003）：農産物直売活動の現状と展開方向、和歌山県農林水産総合技術センター、農業経営研究資料等２号、pp１～14。

14）鷹取泰子（1959）：埼玉県における協同経営農産物直売所の立地展開とその地域的性格、埼玉地理19、pp１～12。

15）岡橋秀典（1997）：わが国農村における農産物直売法の展開とその存立形態、地域地理研究２、pp44～55。

16）篠原重則（1991）：「過疎地域の変貌と山村の動向」大明堂、330頁。

17）篠原重則（2000）：「観光開発と山村振興の課題」古今書院、226頁。

18）篠原重則（1999）：農産物の直売と山村の活性化－愛媛県日吉村の事例－、香川大学教育学部研究報告Ⅰ、107号、pp１～23。

19）篠原重則（2002）：愛媛県中山町における農産物の直売と山村活性化の課題、愛媛の地理、16号、pp261～291。

20）篠原重則（2006）：「農林水産物の直売事業による農山漁村の活性化に関する研究」平成15～17年度科学研究費基盤研究（Ｃ・２）研究成果報告書、155頁。

21）西澤直行（1999）：雑穀、なぜいま注目されるのか－内外生産の現状とその生理機能性－、ライフサイエンス、Ｖｏｌ４、Ｎｏ１、pp69～113。

22）西澤直行（2002）：キビ・アワ・ヒエの機能性、農林水産技術研究ジャーナル、Ｖｏｌ25、Ｎｏ11、pp33～40。

23）西澤直行（2002）：ヒエ・キビを原料とした雑穀パンの開発－産学宮民農の連携－ＡＮＮＡＬＳ、Ｖｏｌ６、pp９～12。

24）大谷ゆみこ（2002）：「雑穀米の神秘」株式会社マガジントップ、96頁。

25）2004年３月27日、日本地理学会において、この研究発表（東京経済大学）当日、ＪＲ国分寺駅内のレストランで、新潟産の小魚定食を注文したところ、ウェイトレスに御飯はどうしますかと尋ねられた。その意味を問うと、御飯には白米と雑穀米（色御飯）があります。「どちらにしますか」とのことであった。

26）アマランサスは南アメリカのインカ帝国の人々の主要な栄養源としての作物であった。現在地球の食糧危機と子供のアトピー禍の中で、ほかの穀物にみられない栄養素と耐寒・耐乾性に富む作物として注目されている。岩手県北部には、1985年に導入された。

27）2003年現在会員の平均年齢は66才で、うち70才以上が９人を数える。

28）有機栽培は害虫防徐のための農薬散布と除草剤の使用はしなく、化学肥料の使用は排除し、肥料は主として牛糞を使用する。病害虫対策は輪作（ヒエ・キビ・アワなどの禾本科植物の跡にはアマランザス・ダイズなどを植えている）によって対応し、除草は主として手作業で行う。

29）小麦の跡地を休耕するのは地力の回復のためである。

30）高村英世は1940年生れ、家族労働力は本人とその妻、長男の妻が受けもつ。岩手県唯一の有機雑穀の栽培者として認定を受け、本人と長男の妻は有機農業の生産行程管理者の認定を受けている。雇用労働力は二戸市のシルバーセンターの社員を主として除草作業に雇用している。1996年からは市内の小・中学生を対象に農作業の体験学習と環境学習を実践している。